

10 春どりレタス品種比較試験

背景と目的

市内で行われている玉レタスの4・5月収穫の作型では、「サリナス397」が基幹品種として長く使用されていますが、収穫期のチップバーン多発が課題となっています。昨年度の試験では、「エムラップ231」が基幹品種に準じる生育をしましたが、地域慣行施肥量では窒素過多と思われる外葉の乱れが見られ、外葉を付けた出荷時の外観が劣ったため、今年度は地域慣行施肥量より施肥量を減らして栽培し、サリナス397と比較するほか、減肥にすることでチップバーン抑制の効果を検討しました。

関係先 旭川青果物生産出荷協議会レタス部会

耕種概要

- ・ 供試品種：4品種（メーカーは総合評価の表を参照）
- ・ 作型：無加温ビニールハウス栽培
- ・ 播種日，定植日：播種 1月10日，鉢上げ 2月13日，定植 3月9日
- ・ 施肥量：N:P:K=12.0:2.4:4.8 (kg/10a) ※窒素分は地域慣行施肥量の4割減

試験結果

- ・ 結球期，収穫期
結球期はいずれも標準品種と同等，収穫始期はいずれも同日となりました（表1）。
- ・ チップバーン
いずれの品種も軽度のチップバーンがほぼ全ての株で発生しました（表1）。

表1 結球期，収穫始期とチップバーン

| 品種名 | 結球期 | 収穫始期 | チップバーン (指数) |
|--------------|-------|-------|----------------|
| サリナス397 (標準) | 3月29日 | 4月25日 | 4 |
| エムラップ231 | 3月29日 | 4月25日 | 4 |
| ツインセット | 3月30日 | 4月25日 | 4 |
| V | 3月29日 | 4月25日 | 4 |

(指数) 0:無 発生が認められない, 1:微 10%未満の株に発生, 2:少 10~20%未満の株に発生
3:多 20~40%未満の株に発生, 4:甚 40%以上の株に発生

- ・ 規格内収量

規格内収量はエムラップ231が最も多く，標準品種も同等でした(表2)。Vは8玉規格が多かったため規格内収量も少なかったです。

表2 規格内収量 (kg/10a)

| 品種名 | 規格内収量 |
|--------------|-------|
| サリナス397 (標準) | 7,213 |
| エムラップ231 | 7,524 |
| ツインセット | 7,047 |
| V | 6,266 |

・特性調査

エムラップ231は各項目が標準品種と同等でした（表5）。ツインセットは球径の割にやや平均1球重が軽く、Vは平均1球重が軽く球径が小さい傾向でした。

表3 特性調査の各項目

| 品種名 | 平均1球重(g) | 球高(cm) | 長球径(cm) | 短球径(cm) |
|--------------|----------|--------|---------|---------|
| サリナス397 (標準) | 537 | 13.7 | 16.4 | 15.1 |
| エムラップ231 | 549 | 13.6 | 16.2 | 15.2 |
| ツインセット | 514 | 13.7 | 17.0 | 15.8 |
| V | 467 | 13.3 | 15.7 | 14.1 |

・各品種の特徴と総合評価

| 品種 | 特徴 | 評価 |
|-------------------|---------------------------------------------------------|-----|
| サリナス397 (標準) | ・生育の揃いが良く、収穫適期の判断が容易でした。 ・球の揃いや形状、外葉の巻きが良好でした。 | (○) |
| エムラップ231 (サカタのタネ) | ・標準品種と外見が酷似し、上記特性もほぼ同じでした。 ・昨年度見られた外葉の乱れは非常に少なかったです。 | ○ |
| ツインセット (サカタのタネ) | ・結球の見目はきれいですが、外葉の巻きの乱れは上記二品種よりは多かったです。 | △ |
| V (カネコ種苗) | ・小球が多く、球が堅くしまっていることが多かったです。 ・球重が軽いため、収量が標準品種より劣りました。 | × |

○：標準と同等 △：劣る ×：大きく劣る



図1 サリナス397



図2 エムラップ231

まとめ

窒素施肥量を地域慣行施肥量から減らすことでチップバーンの発生を軽減することはできなかった一方で、エムラップ231が標準品種と生育特性や収量、球径や1球重が同等であると評価できました。この他、7品種を地域慣行施肥量で栽培し比較しましたが、サリナス397と同等以上と評価できる品種は無く、サリナス397以外の品種を栽培する際は地域慣行施肥量より減らした施肥量での栽培が必要であると考えられました。